様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　4 月　14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520268
研究課題名（和文）　明清における非古の文体と家族・ジェンダー

研究課題名（英文）　Family and Gender in the New Prose of Ming-Qing Dynasty

研究代表者
野村　鮎子（NOMURA　AYUKO）
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60288660

研究成果の概要：
明清時代には、文人が自らの家族の女性を描写する新しい文体の散文が流行する。しかし、これらは「載道（儒教思想を体現する）の文」や「天下国家を論ずる文」を重んじる文学観の立場からは「非古」（非伝統的・卑俗）だとして研究の対象とされてこなかった。本研究では、明の帰有光らの作品を中心に、ジェンダーの視点から家族や女性を描く散文を再評価し、「非古」の文の流行の背景に、明から清にかけての文人の文学観の変容があることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	540,000	3,540,000

研究分野：中国文学
科研費の分科・細目：文学　　各国文学・文学論
キーワード：中国文学・明清文学・古文・非古・帰有光・ジェンダー・家族

１．研究開始当初の背景

中国の古文（散文）の中には、「非古」あるいは「変体」であることを理由として、従来、評論や研究の対象とされてこなかった作品群が存在する。たとえば、明清時代の文人が自らの家族の女性のために撰した行状や墓誌銘、女性のための寿序などがそれにあたる。

中国の「文は天下国家を論ず」という伝統的価値観の下では、「非古」という言葉には、いにしえからのものではないというだけではなく、「高雅ではない」とか「本来あるべき文ではない」というイメージが付与されてきた。そのため、これについての研究や専門書は存在していなかった。

そもそも明清文学をジェンダーや女性の視点から論じた研究は極めて限られる。まず、挙げられるのは張宏生編『明清文學與性別研究』(江蘇古籍出版社 2002 年 10 月)である。

これは 2000 年 5 月に南京大学明清文学研究所が開催した「明清文学とジェンダー国際学術研討会」の成果であり、54 篇の論文を収めている。ただし、該論文集の大半は明清小

説や戯曲の中の女性表象についての論考である。それに収録されている研究代表者野村鮎子の「明清女性寿序考」は唯一明清の古文についての論考であり、従来「非古の文」として研究対象とされてこなかった女性の寿序を、ジェンダーの視点から捉えなおそうとしたもので、本研究の基礎となる研究であった。

その後、野村は、関西中国女性史研究会の代表として、論文集『ジェンダーからみた中国の家と女』（東方書店 2004年）を編纂し、自ら「士大夫が語る家の中の女たち―ジェンダーの視点からの古典研究の試み」を執筆し、今後のジェンダー視点からの古典文学研究について、おおよその道筋を示した。

また、野村は2002年、東北大学で行われた第54回日本中国学会にて「先妣行状の系譜―母を語る古文体の生成と発展」を口頭発表、翌年の学会誌に「帰有光「先妣行状」の系譜―母を語る古文体の生成と発展」（「日本中国学会報」55集 2003年）を投稿し、掲載が許可された。これは「非古の文体」の１つである「先妣行状」についての専論である。

このように明清の「非古」の文体についてのジェンダー視点からの研究は、ほとんど野村鮎子一人が散発的に行っていたもので、体系的にまとめたものは存在していなかった。

２．研究の目的

女性や家族を描写する文体が「非古」としていささか低く評価される最大の理由は元来、男性を語るために存在していた文体で、女性や家庭内の出来事を語ったという点にある。

一例として、自らの亡母について詳細に語る「先妣行状」、亡妻について語る「亡妻行状」があるが、前者は明代に、後者は清に入ってから流行した文体であり、唐代にはなかったものである。

行状は、本来は官僚が亡くなった後、その生前の政績を朝廷に報告するために、また墓誌銘の執筆を依頼する際の参考資料として遺族が撰するもので、女性には一部の皇族を除いて行状は書かれないのが普通であった。

そのため、女性の行状が初めて登場した宋代では、「非古の文体」であるとして、これを執筆することは批判の対象とされた。ところが明清時代になると、文人は母や妻や娘の死に際して、自ら進んで行状を執筆し、その中で家族や家庭内の生活について語るようになる。

女性の寿序もまた、従来は男性の寿誕（誕生祝い）の贈序であったものが、明清時代に女性の寿誕の習俗が盛んに行われるようになって以後、広く女性にも贈られるようになったものである。寿序もまた、明清では、行状と同じく女性や家族を語る文体として機能したのである。

本研究の主要な目的は、「非古」として卑しまれてきた文体を、家族やジェンダーの視点から再評価することにある。

中国の散文の書き手は男性であるが、文学は男性だけを主体者として自己完結していたわけではない。作品のテーマや文体の変遷という面からすれば、叙述の対象であった女性もまた間接的であるにせよ、文学を構成する重要な要素であることを論証する。

３．研究の方法

（１）個人研究

まず明の帰有光、およびその衣鉢を継ぐ者たちの「非古」の文を中心軸に置いて研究を進める。帰有光は女性を語ることを得意とした古文家として有名だが、その評価は、清代、「俚に近く繁に傷む」（方苞）とするものから「明文第一」（銭謙益）とみなす者までさまざまである。これはつまるところ「非古」の文体をどのように評価するかという問題と直結すると考えられる。「非古」の文体は帰有光という実作者によって発展し、古文としての完成度を高めていったといえる。

この個人研究の成果は、専門研究書にまとめて世に問う。

（２）海外の研究者との連携

海外の明清文学やジェンダー研究の専門家との共同研究を通じて、テーマを深める。特に、明清時代に「非古の文体」が発達した背景を考える際には、家族論やジェンダー視点が有効であることから、この分野に詳しい専門家との連携が不可欠である。

４．研究成果

（１）論集『歸有光文學の位相』（汲古書院 2009、総 488 頁）の公刊とその内容

研究代表者野村鮎子のこれまでの帰有光

文学についての研究と、本科研費補助研究の成果をまとめて論集『歸有光文學の位相』として出版した。日本のみならず中国や台湾を通じても帰有光に関する初の本格的な専門論文集となった。

本書の構成は、二部から成る。

第Ⅰ部「帰有光評価の転換」では、まず、第一章「明の文学状況と帰有光」で帰有光の伝記とこれまでの研究状況および問題点をおさえたうえで、第二章以下、明末から清にかけて帰有光文学が再評価されていく過程を、銭謙益、黄宗羲、帰荘、汪琬、桐城派の順に論じた。

第二章「銭謙益による帰有光の発掘」では、『列朝詩集』の中で古文辞派を斥け帰有光を明文第一とした銭謙益が、反古文辞の枠組みの中で帰有光像を典型化しようとさまざまな伝記資料の捏造を行ったことを指摘した。

第三章「黄宗羲の帰有光評価」では、『明文案』『明文海』編纂の過程で帰有光を明文第一とすることに躊躇した黄宗羲だったが、帰有光の抒情文に強く引かれ、これを「一往情深」と評し、実作のうえでは自ら「真の震川」を以て任じていたことを論じた。

第四章「帰荘による『震川先生集』の編纂出版」では、今日最も行われている帰有光の文集、康熙本『震川先生集』編纂出版の過程を、帰有光の曽孫で明の遺民となった帰荘の立場から考察した。

第五章「汪琬の帰有光研究」では、清初の古文三大家の一人で、帰有光の文を帰文と呼んでそれに心酔した汪琬の帰有光受容を検討した。康熙本『震川先生集』の校定をめぐる帰荘との論争、および台湾の国家図書館に蔵される汪琬批校本『帰太僕先生集』の汪琬批語を通じて、汪琬の帰有光研究の意義と康熙本の問題点について考えた。

第六章「桐城派の帰有光評価」では、帰有光文学を継承したとされる桐城派ではあるが、実際に帰有光文学のどのような面を評価するかについて、桐城派人士の主張は一様ではなかった点に注目した。戴名世、方苞、劉大櫆、姚鼐、張士元、呉徳旋、曽国藩、呉敏樹、林紓の帰有光評価を概観した。

第Ⅱ部は「帰有光の古文」で、帰有光の作品、特に家族や女性を描いた散文を具体的に分析した。

第一章「「先妣事略」の系譜」では、亡母を語る文体である先妣行状の生成と発展の過程を考察する中で、帰有光の「先妣事略」の登場はどのような意味をもったのかについて論じた。

第二章「「寒花葬志」の謎」では、帰有光抒情文の代表作とされる「寒花葬志」の背景にある謎に迫った。

第三章「帰有光の寿序」では、従来、中国散文史の中で「非古」として蔑まれてきた寿序という文体が、家族や女性を語る散文として、どのように生まれ、発展してきたのか、そこで帰有光の作品が果たした役割を考察する。第四章の「帰有光と貞女」は、帰有光が千年の後にも伝わらんと豪語した渾身の作「書張貞女死事」への思いとその執筆動機を考えた。

第五章の「二つの『未刻稿』」では、上海図書館と台湾の国家図書館に蔵されている鈔本『帰震川先生未刻稿』についての調査報告である。

（２）非古の文体とドメスティック・バイオレンスに関する研究成果の発表

女性への虐待やドメスティック・バイオレンスが、男性の社会的地位や学歴・職業に関係なく起こり得るものであることは今日では周知の事実である。しかし、これまでの研究では、士大夫の家は「父子・兄弟・夫婦相い和順す」といった儒教の訓えが体現されたものであるという建前から、士大夫層のドメスティック・バイオレンスが明るみに出ることはほとんどなかった。文学研究でも、夫や舅姑による嫁への暴力の描写は小説の世界のことであり、士大夫の正統文学である詩文にはドメスティック・バイオレンスを描いた作品はないと考えられてきた。

研究代表者野村は、国内の漢籍所蔵機関のみならず、北京国家図書館・上海図書館・台北国家図書館の古籍善本室へ赴き明清詩人の詩文集を広く調査し、その結果、婚家先で非業の死を遂げた娘について父親が哀悼した詩文を数篇発見した。

婚家先での虐待の詳細は、女性のための行状といった、明清時代に流行した所謂「非古」の文体で描かれている。また、いずれの作品にも共通するのは、娘を喪ったことの父親としての哀しみと、娘を虐待して死に至らしめた婚家への怨念、そしてこのような家に嫁がせたのは、ほかでもない父親の自分であり、娘を救えなかったという自責の念の吐露である。

こうした文学の背景には、前近代の中国の女性は「孝」や「従一而終」といった規範のため、一旦嫁げば舅姑や夫からの虐待があっても離縁はほとんど不可能であったこと、特に士大夫階級の教養ある家庭の女性ほどその抑圧が強いというジェンダーの問題が絡むことを明らかにした。

この成果については、論文「中國士大夫のドメスティック・バイオレンス―出嫁の女の虐待死と父の哀哭―」（『奈良女子大学文学部研究教育年報』３号, 2007）として公表した。

（３）海外の研究者との共同研究の成果

2008 年 10 月に海外の共同研究者である南京大学中文系の曹虹教授を招き、一ヶ月間奈良女子大学で共同研究を実施し、10 月 28 日同校にて公開研究会「明代古文と女性」を開催した。公開研究会では、研究代表者である野村が「明代における非古の文体と女性」を、曹虹教授が「明代における女性古文家の登場」を報告した後、参加者 28 名全員で討論を行った。松村昂編『明人とその文学』汲古書院 2009）に発表した論文「明代における非古の文体と女性」はそのときの成果である。

明は婦徳が賛揚された時代で、ややもすれば烈女伝、節婦伝、貞女伝のように、守節のため壮絶な死を遂げた女性の伝記ばかりが喧伝されがちである。しかし、本論に紹介した行状や寿序に描かれた女性たちのほとんどは士大夫の家で普通に暮らし普通に生を終えた女性たちである。

このような新しい形の古文が発展した背景には、士大夫の文学観の変転があったことも見逃せない。古文は為政者が天下国家や道を論じるためのものから、日常の家庭生活や身辺の雑事を書すものへとその関心を移しつつあった。

これまで叙述のテーマとなりにくかった、士大夫の家の女たちの生活、肉親への慕情を綴る作品の「受け皿」となったのが、行状や寿序といった、古文の道統からみれば「非古」にあたる文体なのである。

明の文人がこれら「非古」の文体で描き出した抒情の世界は、中国散文史を多様で豊饒なものにしている。

さらに 2008 年 11 月にはジェンダーの視点から中国文学を研究する台湾の清華大学中文系の劉人鵬教授を招聘した。一週間の連続研究会の後、11 月 30 日の学内報告会では、劉教授が「含羞の文学とジェンダー・セクシュアリティ」を報告、野村がそのコメンテーターを務めた。

（４）海外の学術シンポジウムでの研究成果の発表

2008 年８月末に台湾中央研究院中國文哲研究所主催の「明清文學文化中的秩序與失序國際學術研討會」にて、「明清散文如何書寫家庭暴力與女性（明清の散文はどのように家庭暴力と女性を描いたか)」というタイトルの論文発表を行った。その時の論文は、文学のみならず女性史の研究者からも注目され、12 月に台湾中央研究院近代史研究所が発行する『近代中国婦女研究』に掲載された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ５ 件）

野村鮎子「明清散文中的女性與家庭暴力書寫」,『近代中國婦女研究』16 号,, 2008, p209－225　査読有

野村鮎子「ジェンダー研究を通じて実現した台湾清華大学との交流協定について」，『奈良女子大学アジアジェンダー文化学研究センターニュースレター』，７号, 2008, p 16
査読無

野村鮎子「中國士大夫のドメスティック・バイオレンス―出嫁の女の虐待死と父の哀哭―」,『奈良女子大学文学部研究教育年報』３号, 2007, p１―16

野村鮎子・高岡尚子ほか「ジェンダー言語文化プロジェクトのあゆみ」『奈良女子大学文学部研究教育年報』４号, 2007, p 19－22
査読無

野村鮎子「長安の記憶―周縁によるみやこの文学イメージ」,『古代日本形成の特質解明の研究拠点報告集』14 号, 2007, p 88－103
査読無

〔学会発表〕（計 ２ 件）

野村鮎子「非古的開展與女性」, 台湾政治大学「百年論学」, 2007 年６月２日

野村鮎子「明清散文如何書寫家庭暴力與女性」, 台湾中央研究院中國文哲研究所、「明清文學文化中的秩序與失序國際學術研討會」, 2008 年８月 30 日

〔図書〕（計 ２ 件）

野村鮎子「歸有光文學の位相」, 汲古書院, 2009, 488 頁

野村鮎子「明代における非古の文体と女性」, 松村昂編『明人とその文学』汲古書院, p25－56

６．研究組織

(1)研究代表者
野村　鮎子（NOMURA　AYUKO）
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60288660

(2)研究分担者　　なし

(3)連携研究者　　なし